

はやま住民福祉センターだより



今月のテーマ

台風被害の被災地への支援活動の報告

9月8日(金)に東海道沖に接近した台風13号による大雨で、関東・東北の太平洋側の広い範囲で浸水被害が発生しました。その報を受け、被害のあった千葉県茂原市にボランティアとして駆け付けた「葉山災害ボランティアネットワーク(以下HSVN)」より、現地でのボランティア活動の様子や、災害ボランティアセンターの状況をレポートしていただきました。地震による災害のみならず、近年台風による甚大な被害も目立っています。今後ご自身の体力やご都合に合わせ、被災地でのボランティア活動について検討いただければ幸いです。

<千葉県茂原市での緊急支援活動について / HSVN より>

台風13号による河川氾濫被害が発生した2日後の9月10日(日)に、茂原市で災害ボランティアセンター(以下災害VC)が立ち上がりました。HSVNでは現地でのボランティアの受入れ状況を確認し、会員に参加を募り、8名の会員が支援に参加しました。9月17日(日)に乗用車2台、トラック1台に分乗して茂原へ。当日は団体のみの受入れで、受付後ただちにマッチングを受け、A班4名は家屋清掃の現場へ、B班4名は土砂撤去の現場へ入りました。

A班は室内清掃。浸水は床上20cmほど。泥は乾き切って床の上に薄くこびりついていた状態。家具を移動しながら、モップで床を何度か水拭きしたあと、タオルで床と壁を拭き上げます。13:30に作業を完了し災害VCに帰着しました。

B班は裏山が崩れてU字溝を埋めたところの土砂撤去。粘土質の土と絡まる木の根に苦戦しつつも、住民3名も応援に来てくれ、なんとかU字溝開通。周囲の土砂は取り切れなかったため、災害VCには継続支援が必要と報告しました。



茂原市災害VCの設置は今回で3回目、運営に混乱は見られませんでした。およそ40~50名いるスタッフの多さに驚きました。各班は屋外に点在するタープテント(ボラ受付、待機場所、マッチング、休憩所)に配置、資機材班のみ玄関脇倉庫で活動。マッチング班は、屋外テント内のホワイトボード1枚で対応し、待機場所、休憩コーナーはゆったりしたスペースをとっていました。ボランティアの送迎は全てハイエース型で、ライオンズクラブが10台借上げて提供とのこと。災害VCの中心スタッフは茂原市社協、県内社協職員などですが、レスキューバイク(RB)のほか、防災士、SL災害救援ボランティアネットワーク、赤十字防災ボランティアや、地元ボランティアが多数活躍していました。ボランティアはシニアが多い印象です。基本的に忠実な役務フローのもと、運営されていると感じました。

※葉山災害ボランティアネットワークとは・町、町社協、防災や地域の関係団体等と協力し、災害時におけるボランティア活動のノウハウの蓄積と人材の育成を図り、ネットワーク化するとともに、被災地の支援活動を行い、もって災害発生時に円滑で効率的なボランティア活動の調整・運営を行うことを目的とする団体。

◆シンポジウム・交流会「地域ぐるみで葉山の子どもたちのためにできること」開催



主に小・中学生などの学齢期の子どもの育ちを支える地域活動が町内で活発化しており、各団体の活動を「知る」、子どものために活動している(したい)個人・団体が「つながる」、今後の葉山での子育てを盛り上げるため「楽しむ」ことを目的に、9月22日(金)シンポジウム・交流会を開催いたしました。企画から「葉山子どものための人材バンク」にご尽力いただき、葉山社協と共催で開催しました(葉山町委託事業)。当日は雨模様にも関わらず、40~50代の子育て世代を中心に、地域で子育てに関わる活動をされている方、町内会や民生委員、防災活動など子どもに限らない地域活動をされている方、保育園や福祉施設、関係機関の方々など、様々な分野の総勢81名という多くの方にご

参加いただき、子どもの育ちを応援する熱い思いや願い、子どもとその親御さんを見守るあたたかな気持ちを交換し合いました。参加者からは「こんなに多くの方が葉山の子どもたちのために頑張っていると初めて知って驚いた」「自分自身を好きだと思える子ども達がたくさんいる町になったらいいな」「このような温かな人たちに囲まれて自分も子どもに戻りたくなった」などのコメントが寄せられました。会場にはお母さんに連れられた0歳児から、80代の方まで参加し、まさに「地域ぐるみで」子どもの育ちを考える機会(場)になったのではないのでしょうか。本催しをきっかけに様々な人や団体がつながり合い、新たな取り組みに発展していくことを願っています。